

ことのは文庫「写楽太平記」解説

「権力」の悪徳と虚妄を暴く反権力スペクタクル

伊 純 純

1. 「阿波騒動」物語の背景

「写楽太平記」は「はじめに」でもご紹介したように「阿波騒動」あるいはその中心人物とされる阿波十二代藩主「蜂須賀重喜」はちすかしげよしの物語である。

阿波騒動は、これまでも小説の題材になっている。

最も有名なのは、大正十五年に大阪毎日新聞に連載された吉川英治のデビュー作「門秘帖」であろう。大衆時代小説の代表的な作品とされ、すでに発表以来九十年近くたつが、その間に映画やテレビドラマに何度も取り上げられるなど、現在に至るまでその生命を保っている。また、近くは、童門冬二「小説蜂須賀重喜・阿波藩藩政改革」という「財政改革」という観点から阿波騒動を見た小説もある。

「阿波騒動」には、何かしら、物語作家の興味をそそる謎が秘められているように思える。

実は、阿波騒動はその発生直後……いや、その最中に早くも「物語」となって人びとに伝えられていた形跡がある。「阿淡夢物語」あたんおよびその続編「泡夢物語」あわゆめという作者不明の、重喜改革に対する悪意をこめた中傷に満ち満ちた「怪文書」である。明和年間（一七六四～一七七二）に流布されたとみられ、そうだとすると、重喜が改革に取り組み、やがて失脚する時期と重なる。まさに「同時代の怪文書」ということになる。

御家騒動は厳しい政治的立場が衝突する場だから、いろいろな主張が流布され、事実関係を説明することが難しい、ないしは立場によっていろいろな解釈が出てくる可能性がある。ある立場では正義のヒーローたる人物が他方では真っ黒な権謀術数の悪人になったり、悪政と善政が入れかわったりすることがざらである。

それだけに、物語作家の想像力と飛躍を刺激する好個の材料となる。物語作家だけでなく、事実を説明しようとする史実研究者にも、推理小説を解くような刺激的材料

となるのである。

そのような背景もあつてか近年、「阿波騒動」「重喜改革」の実態解明は大幅に進んだ。「鳴門秘帖の旅」(一九七七年 教育出版センター刊)や、「主君『押込』の構造——近世大名と家臣団」(笠谷和比古 一九八八年平凡社刊)、『名君』の蹉跌——藩政改革の政治経済学」(マーク・ラビナ二〇〇四年 NIT 出版刊)「蜂須賀家騒動・重喜の改革をめぐる君臣抗争」(根津寿夫 新選御家騒動(下) 所収二〇〇七年新人物往来社刊)などが参考になる。

ところで、その阿波騒動と重喜の詳細は、あらためて触れることにして、「写楽太平記」というやや奇想天外に過ぎると思われるこの小説自身について考えてみよう。その「奇想天外」によって作者はいったい何を語ろうとしたのだろうか。

2. 「写楽太平記」に潜む想い

「写楽太平記」は、蜂須賀重喜の藩政改革を題材にしている、とはいうものの、少なくともその歴史的な実態を描きだそうというような史伝的な小説ではない。そもそも、その書き出しからしてただごとではない。

物語は臣下の主殺しという異常な活劇から始まる。小藩とはいえ、れっきとした二万石の大名佐竹家の江戸藩邸の庭で、突然槍術指南の侍が、主君の四男・岩五郎(後の蜂須賀重喜)に「上意討ちじゃ!」といって襲いかかるのである。岩五郎は辛くもその槍先から逃れるが、その脱出を助けるのが岩五郎の遊び仲間で、何かにつけて「しやらくせエ!」と捨てぜりふをいう癖のある阿波藩お抱え能役者の十郎兵衛である。ともかく、この発端からして、ほとんど荒唐無稽の大活劇である。しかし、その後の物語の展開などもからめて考えていくと、お話しそのものは確かに荒唐無稽だが、わざとその無茶苦茶ぶり・荒唐無稽ぶりを、これみよがしに冒頭で繰り広げてみせる作者の作為が見えてくる。

つまり作者は、これから始まる物語は、並の読者が、並の常識的な時代小説に期待するような甘つちよろい世界ではないぞ、と、読者の常識の「天地返し」を試みているのだ。

例えば、藩主の息子、つまり主君筋を、「上意」とはいえ一介の藩士が殺しにかかるというのは、身分社会では最高の重大犯罪である。「主殺し」は通常の殺人とは区別され、切腹や斬首では済まない。切れ味の悪い竹鋸で首を挽ききるといふ極めて残酷な処刑法が適用される極悪犯罪なのである。

しかも、この主殺しを命令した、いわば「主犯」は、岩五郎の実の親の佐竹藩主老岐守義道である。この老岐守は、極めて吝嗇けちで卑小の極みのつまらぬ老人として描かれている。「子殺し」の動機は、息子が放蕩もので金を浪費するのが惜しくて堪らない、ということらしい。——因みに、この放蕩息子が突然阿波二十五万石の太守になると、殺害をはかったことなどけろりと忘れて、最高の金づるとばかりに「仕送り」をせがむという破廉恥老人ぶりを示す。

また、十郎兵衛という岩五郎の放蕩仲間の能役者も誠に奇怪な人物である。能役者にしてはめっぽう強い。槍術指南の槍のプロの侍を、逆に一突きで刺し殺してしまう。槍術指南は、よりによって顔を刺し貫かれ「ギャー」という叫び声を残して、大川を流れていってしまうというでいたらくである。

この気の毒な槍の先生に限らず、作者の視線は武士階級に対しておおむね冷たい。重喜が藩主となって入った阿波藩江戸屋敷は、得体の知れぬ陰謀と隠密の魔窟のようなどころとして描き出される。ギヤマン風呂という殿様専用の硝子張りの大浴場があつて、奥向きのお女中たち数十人が裸で奉仕するという色模様を展開するかと思つてみると、反対派の手先か隠密か、なきなた長刀を持った裸女がいきなり斬りかかってくるわ、竜舌蘭の鉢植えの中には毒蛇が仕込まれているわ……上を下への大騒ぎが起つて一夜のうちに何人もの人死に出る。

この殺人騒動が幕府大目付（大名を監察する老中直属の役人）に伝わり、呼び出された重喜はいろいろ詰問されるのだが、事前に莫大な賄賂を贈つてあるから、取調には迫力がない。おまけに、その取調の主題というのが、奥向きでの殺人事件などそつちのけで、「従来阿波藩奥向きの待妾は三代將軍家光から三十六人置くことをお認め頂いていたが、今回お国入りに際して、大年増ばかりになつてしまった江戸の三十六人以外に、徳島表にも地元のピチピチした生娘三十六人を取りそろえ励みたいので、待妾倍増のことをご認可いただきたい」といふ途方もない話。

そんなやり取りが、大目付以下側役一同居並ぶ中で、大真面目で審議されるのである。本来大目付といえ、江戸時代を通じて、日本中の大名に睨みをきかし、実際に百を超す大名家を、些細な口実を設けて改易（取り潰し）している。大名たちにとつて最も恐ろしい相手なのである。

ところがここでは、十分にばらまいた賄賂のおかげで、二十にもならぬ若者の弁舌に丸め込まれ、待妾倍増は認められてしまったりする。

このように、幕府から阿波藩まで、武士と役人、つまりは権力の世界はどうしようもない腐敗墮落の極地、というメチャクチャ状態が執拗に描き出される。

さらには、物語の終わり近くに、重喜失脚の陰謀を仕掛け続けた幕府隠密の首領黒木黒兵衛が、当の幕府から使い捨てに捨てられて、牢獄の中で拷問と暴行によっていびり殺される有様が、これでもかというほど執拗に描かれる。もはやここまでくると、それは、単なる思想的な反権力志向の域を超えている。どうしても、私はそこに、戦前左翼運動の中で見聞き恐らく自らも体験したであろう取締権力の精神的肉体的暴力への怒りと恨みが、作者の中で決して癒えていなかったのだ、と感じないわけにはいかない。極めつけの大衆小説の最中に、正視をはばかるような暗い情念を感じさせる一節である。

ところが一転して、庶民、民衆の世界となると、作者の見方はがらりとかわる。

その最たるものは、お千代船の「お千代」であろう。実は「お千代船」というのは固有名詞ではなく、江戸時代、隅田川で船を浮かべて客をとった最下層の売春婦のことである。その、最下層女性の代表として「お千代さん」は登場する。

このお千代は、武士・役人など陰謀世界の住人とは正反対で、誰にでも心底親切、困っている人を見捨てたり裏切ったりといったことができない、女神か観音様かというような娼婦なのである。槍術指南の家臣から不意討ちをくらい大けがを負った岩五郎（重喜）を、だまったくくまい手当をして何の見返りも求めない。

十郎兵衛の妹で料理屋の下働きをしているという小娘「お半」も人を疑ったり邪慳にしたりという天性をもちあわせていない。兄の親友と聞くと何の疑いもなく岩五郎を信じてかばい、惚れ込む。そんな清純な心を生まれながらに持っている。

それだけではない。行きずりの庶民も、純な魂の人びとである。重喜が阿波へのお

国入りの途次、暗殺者を避けて猿回しに変装して道中するという奇想の旅の途中、鳴門・堂の浦の磯吉という貧しい漁民の家に宿を借りるが、磯吉は宿代など根っから受け取ろうとしない。実は磯吉の娘二人が、阿波藩の大奥へ女中務めに上がっているのだが、そんな娘の威光を笠に着て御城下などへは行きたくない、という高邁な精神の持ち主である。

こうして、武士や役人、社会的地位の高い人、権力者などなど……一口にいつていわゆる「偉い人」ほど実は一皮剥がせば悪徳にまみれた、信用ならない人間どもであり、逆に、何の地位も権力もない庶民、弱者ほど、真面目で誠実な人びとなのだ、という「逆転の人間観」が、物語を貫ぬいている。

だから、江戸の街中で放蕩の限りを尽くし、大名である親から命を奪われそうになった岩五郎・重喜は、生まれは武士だが、庶民、底辺の暮らしを体験し、何がまっとうなことで、何が嘘なのかという世の中の真実を見抜く目を身につけた若者と位置づけられている。

そういう清純で素直な心を持った若者が、陰謀と悪徳の渦巻く「お殿様の世界」に果敢に突入し、白黒をつけようと、身の程知らずの闘いを挑む、というのがこの物語なのである。

このようなモチーフ——地位や権力を持った「偉い人」たちの嘘と悪徳への怒り、対称的に地位もお金もない庶民、弱者への共感——これは「写楽太平記」に限らず、貴司の多くの作品に共通する。

例えば社会主義的な作品の代表ともいえる「ゴー・ストップ」でも、組合運動やそれを指導する共産党員への残虐な弾圧に義憤を感じたというのが根底的な執筆の動機となっており、厳しい弾圧で元気を無くした労働者たちの自己主張の闘いを助けてやりたいという思いで「ゴー・ストップ」は書いたと作者自身が述べている。

あるいは、戦後丹波山中に疎開して開拓農民となって食うや食わずの生活をおくるなかで書いた「丹波アリラン」という小説では、皆が闇取引や隠匿物資の利権に目の色を変えている中で、「盗み一つできず」じつと飢えに耐えながら黙々と働いている一朝鮮人に、限らない連帯と人間信頼の原点を見ることが描かれている。

結局、この作者は、「偉い人」「権力者」が嫌いで、弱者、庶民、大衆に共感し、

その目線に立とうとする。

「写楽太平記」という波瀾万丈……というよりは、破廉恥、ハチャメチャに見えるこの物語にも、実はそういう逆転のモチーフが底流しているのである。

3. 十七歳の東北の若者が突然藩主になった

ところで、この大騒動の背景となった「阿波騒動」「重喜の藩政改革」というのは、実際にどのようなものだったのだろうか。御家騒動の一種とされる「阿波騒動」は、二つの事柄がからみ合って展開された、大変根の深い事件と考えられる。

からみ合った一方は、一般に「重喜の藩政改革」といわれる、阿波藩の統治制度に対する極めてラジカルな改革である。そしてもう一つは、それとからみあいながら進展した、阿波の藍売買に関する商業制度の変革である。

事の発端は、秋田新田藩二万石という小藩の四男坊、何者とも分からぬ十七歳の少年岩五郎が、突然末期養子（先君が急死し、後継ぎがないと御家断絶してしまうため、臨終段階に形式的に養子を取り後継者にするやり方）として阿波藩二十五万石の殿様になったことである。岩五郎の実父で新田藩主の佐竹壱岐守義道という人は、本家主を毒殺して本家を乗っ取ったとか、いろいろ噂の多い人だったので、このやや不自然な阿波藩代替わりにもスキヤンダルを想像する余地があるのかもしれない。

しかし実際はそういうものではないと思う。江戸には全国の大名の屋敷があり、原則子弟はそこに住んでいる。つまり、江戸は、行く当ての決まらないお殿様の次三男たちがゴロゴロしている都市だったのだ。幕府中枢はそれら大名子弟の有様について情報を把握していたはずである。継嗣がないなど、問題がある大名家に介入して、行き端のない大名の次三男を斡旋するなどのトップ人事は、幕府にとって極めて重要な仕事だったと思われる。まして、二十五万石の大藩のトップ人事となれば、藩の一存で事が決められたはずはない。

阿波藩相続問題の起きた一七五四年頃（宝暦年間）といえ、たぬまおきつぐ田沼意次が將軍御用取次となり、幕政を牛耳り始めた頃である。田沼は賄賂まみれの政治家として悪の見本のような評価が定着してしまっているが、実はそうではなく、進歩的な政治改革を行い、財政的にも相当な成果をあげたとみられている。人の話をよく聞き根回しに

もたけていたようだから、阿波藩トップ人事に関わっていなかったはずはない。おそらく、若者組の中の逸材として重喜を阿波藩に斡旋したのではないか。

そして実際、重喜のその後の行動は、彼が決して凡庸な若者ではなかったことを示している。

4. 重喜改革の第一幕・人材登用の「新法」提案

阿波の藍はすでに戦国時代の頃から栽培されていたらしい。しかしこれが「全国ブランド」の地位を築いたのは、対岸大坂地方の木綿と結びついて「藍染め木綿」が庶民の衣服として圧倒的に普及したためである。

江戸時代中期、商業が発達する中で、封建的な米経済に頼っていた武士たち——幕府も諸藩も、財政逼迫に苦しんでいた。阿波藩も例外でなく、やがて、大発展している藍産業に目をつけるようになる。

一七五四年（宝暦四年）、それは奇しくも重喜が阿波藩主になった年だが、徳島在では藍の「株仲間制度」が創設された。藍の売買を大手業者にかぎるといって一種の公的カルテルを作ったのである。ところがこれにたいして藍耕作農民に不満が鬱積し、ついに一七五六年、吉野川中流域に広がる広汎な反対運動（五社宮一揆）が勃発する。一揆は翌年、首謀者五人の磔という過酷な弾圧によって一応終熄する。

おそらく、殿様とはいえ新入りで若い重喜は、この一揆の顛末、家老たちの事件処理の手並み、統治組織の働きをじつと観察していたのだろう。そして、多くの問題点を学び取ったに違いない。

五年後、二十二歳になった重喜が動き出す。

一七五九年（宝暦九年）二月、重喜は「役席役高の制」（一般に「新法」と呼ばれた）を藩政スタッフに提案する。

この提案は、わかりやすくいえば、藩士の格付けを三段階に単純化し、家老（会社組織でいえば重役級）、中老（同じく部長級）、物頭（課長から平社員）とする。さらに特徴的なのは、仕置き（筆頭家老、社長ないしCEO／因みに藩主は会長である）は従来家老級のなかから専任されたが新法では中老級からも選ばれうる。家格より高

い地位に就いた場合はその期間だけ職務給が加算される。

つまりは、家格に安住して家老職をむさぼってきた人びとへの鉄槌であり、人材登用の風穴をあける革新的提案である。

ところがこの新法に対して、猛烈に反対する家老が現れる。山田織部が激しい「かんしよ諫書」を提出する。そこには「旧格は御家代々の作法で重喜一存で変えてはいけない。養子の身なのだからなおさらではないか」とまで書いてある。

反対理由は「旧来のしきたりを変えてはいけない」という保守的な主張に過ぎないが、よほど頑固な人物だったのだろう、その文面は強硬である。

これに対して驚くべきことは、二十二歳の重喜が「切れ」なかつたことである。

まず彼は中老格の身近なスタッフ「近習」たちを説得して味方につける。

その上で翌日から、山田を含めた家老職と中老格の人びとを集めて緊急御前会議を開き、理路整然と山田の主張に反論し、何と二日にわたる徹夜の議論を続けるのである。前記（3頁参照）「主君『押込』の構造」で著者笠谷和比古は「重喜の議論は、学識の点でも論理的な鋭さの点においても、家老や近習らのそれを数等上回る」と評価している。

しかし、それでも、既得権に固執する家老たちの賛同は得られなかつた。

すると、徹夜の翌日、彼は突然「同意を得られないのは我が身が至らぬため」として藩主引退を宣言する。これには家臣たちが慌てる。本当に引退されたら、御家断絶の危機である。結局、家老、中老とも重喜に従うことを誓約するに至るのである。

かくて重喜は議論に勝った。しかしここでまた二十二歳の若者と思えぬ心憎い対応をとる。心従してくれるなら引退は取り消す、とともに、新法の実施も当分見合わせる、というのである。議論に勝っても、真の心従が得られるものではないことを知っていたのであろう。

こうして、重喜改革の第一幕は、いわば抵抗勢力とのジャブの応酬で引き分けとなった。しかし実は、争いの根は残った。頑固者の山田織部は閉門となったが、心中の鉾を収めてはいなかつたのである。

他方で、藍カルテルをめぐって起こった五社宮一揆から三年たって、その結末に大

きな動きがあった。当時の一揆勢の要求が実質的にすべて受け入れられるに至ったのだ。官製のカルテルが廃止され藍の生産と売買が自由化された。

5. 重喜改革の第二幕・見えざる藍利権との闘い

重喜改革の第二幕は、主君呪詛という奇怪な事件で幕を開ける。

一七六一年（宝暦十一年）、重喜は藩の収支が年々赤字であり、負債も既に三十万両に達したという厳しい状況に対応するため、期限七年間の儉約令を発した。これにたいして、孤立して「新法憎し」に凝り固まっていた山田織部が、なんと、歓喜院という山伏に「主君退身」の呪詛を依頼したのだ。呪詛は念の入ったことに「この祈りが幕府と、内匠頭重隆様にも通じるように」と付け加えられていた。幕府に内紛が伝わればどんな介入を受けるかも知れないし、さらに内匠頭重隆というのは阿波藩にとって極めてデリケートな立場の人物であった。当時の阿波藩は先々代から蜂須賀の血脈は絶えているが、重隆は唯一その血脈を継ぐ人だった。病弱で藩主たることを辞退していたが、藩内にはこの人を担ぎ出して蜂須賀の血筋を回復しようという隠然たる勢力があるとされていた。

織部の呪詛は、触れてはならぬタブーを三つも侵していた。このことが藩大目付に漏れ、織部は捉えられ審問の上切腹、御家は断絶となった。

家老格の人物の一大スキャンダルである。重喜はめざとくこの事件を、家老たちの権威を抑え、独裁体制を確立するのに巧に利用していったように見える。

一七六六年（明和三年）、棚上げから七年たつて、ついに重喜改革が全面的に始動するのである。

この年二月、二八歳になった重喜は、まず藍市場に介入する財政改革に着手する。

阿波の藍産業は一七六〇年の制度改定で、ほぼ自由化されていた。自由化は、一揆勢、つまり在地の生産者の要求だったが、時が立つうちに生産者に不利な状況が顕在化してきた。阿波藍の最大の売り先は大坂市場である。阿波在地の生産者に較べて、対岸のこの買い手たちは概ね巨大であり資金力も豊富で、市場をコントロールしていた。阿波側の生産者は、今や、作付け資金から肥料代まで（藍は非常に肥料を喰う作

物なのである）大坂の買い手（問屋）から前借りせざるを得ない状況だった。そのような力関係の下で、阿波の生産者は大坂のマーケットのいいなりに耐えなければならぬという苦境だった。

何とかしなければいけないというので、藩は在地の生産者や扱い業者に意見を徴したところ、庄屋でかつ藍加工も営む小川八十左衛門やそざえもんが極めて優れた建議書を提出した。大坂の買い手カルテルの横暴に対抗するために、阿波の生産者が団結して藩の管理下に市場を徳島に作り、そこで、阿波側、生産者側の利益に基ずく価格形成、売買を行う、という、いわば買い手に対抗する売り手公営カルテルの提案である。さらに、従来生産者が大坂問屋に対抗できなかったのは、生産資金を彼らに依存せざるを得なかったため、藩がその点も手当てする必要がある、ということまで見通していた。

藩はこれを公開し、広く意見を求めた上で、同年七月六日に新政策は実施された。

大局的にいって江戸時代というのは、農村から生まれ出た商業が、次第に発達して封建制度の壁を壊していった時代と考えることができる。その過程で、大きな資金を得た者は商業資本となって流通や生産をも支配する力を得る。幕府も藩も、そういう根本的な経済の変化には無知のまま、権力に依存して何とか目先の不都合を改善しようとするので、経済の流れに沿わない不合理なやり方になる。

その中では、この小川八十左衛門プランに基づく改革は、確かに形は官営カルテル提案だが、実際の在地生産者の智慧に基ずくだけあって、合理性がある。現実の生産者や在地の業者の利益を守り、藍生産を盛んにする（八十左衛門は、大坂問屋の横暴で阿波藍は年々生産量が減っており、このままでは滅びてしまうと危機感を表明している）という点で有効な提案になっている。

ただ「得をするものがいれば、必ず損をするものがある」。この改革で大損をするのは、大坂の市場がなくなり、いちいち徳島まで出かけて藩の規制の下で不利な取引をしなければならぬ大坂の問屋たちだ。

改革案施わずか二月後には、早くも大坂問屋筋の反撃が始まる。大坂の卸売りや仲買人たちが大坂町奉行所に駆け込んで「困窮」を訴えた。大坂町奉行は調査の末、徳島方に有利な裁決を下そうとしたらしい。しかし、江戸の老中から「まった」がかかった。老中首座松平武元たけちかは將軍家治から「西丸下の爺」などと、その剛直と頑固ぶ

りを愛されていた保守主義者だった。先例を廃して新しいことをやるのが気に入らなかったのか、阿波藩は老中介入によって完全敗訴となってしまった。合理的だがラジカルな重喜・小川経済改革は、大坂の間屋資本勢力に負けたのだ。

阿波藩は完全敗訴で表面的には大打撃をうけるが、不思議なことに、阿波藍をめぐる状況はそれほど変わらなかった。阿波の家老たちは面従腹背を決め込み、建前を守るふりをしながら現実には現実でしかるべく処理していったのであろう。

六・重喜改革の第三幕・政治改革の失敗と隠退

一七六六年（明和三年）、重喜は上記の経済改革と同時に、かつて棚上げにしていた「新法」にも着手する。

重喜は家老級の人びとの「肅清」からその「仕事」を開始した。

それは、平島公方という阿波領内に存在する、足利将軍の縁戚という不思議なグループの処遇問題を利用したものだだった。

平島公方は足利の流れということでは不思議な人気があり、江戸や京都から文化人が訪ねてくるなど、一種文化サロンのような趣を呈しており、従来は百石ばかりの捨て扶持で暮らしていた。それが最近体面もあるので加増を懇願していた。そして、重喜が江戸在勤中に家老たちが勝手に加増を認めてしまった。重喜は激怒し（激怒するフリをし？）いろいろいきさつはあるが究極、家老三人を引退に追い込みほぼ独裁体制を確立する。

次いで、中老二人を家老職に、物頭格の数名を中老身分にと、自由な人材登用を実施。いわば家格にとらわれない能力主義の官僚体制をつくっていった。また、飢饉に備えた穀倉の設置、儉約令、鷹狩り地の開墾、など多方面の社会政策も実施した。さらには無能（……と重喜が思った）役人の減俸や解雇も始まった。

このあたりまでくると、改革政治は独裁政治、さらには恐怖政治へと変質し始めたのかもしれない。

そして、一七六九年（明和六年）十月、突然どんでん返しがやってくる。

阿波藩江戸屋敷に、老中首座松平武元の召喚状がもたらされたのだ。「……家法取

り乱し……無筋の仕置き……遊興」——尋問の条項は、今まで重喜がやってきた改革の内容に付合する点も有り、これを悪とされると弁解のしようがない、つまり、重喜の施政の全否定のような内容だった。

江戸家老たちは裏工作に奔走し、正式の「御吟味」になる前に「主君隠退」を画策、なんとか「政事の義宜しからざるに付き」隠退という形にこぎつけた。しかし、家督は実子治昭はるあきに継がせるが、改革政策はすべて廃して以前の「家法」の通りに戻せ、と念が押されていた。

こうして、重喜は表舞台から去り、家老たちの政治が復活した。

七．おわりに・写楽のことなど

重喜が闘った相手は、第一は藩政改革によって既得権を失うことをおそれた家老たちであり、第二には、経済改革で既得権を侵害された大坂の間屋たちだった。ただ、この力関係が複雑なのは、藩政改革に反対する家老たちも阿波藍を守ろうとする点では経済改革推進の立場だった。ところが、政治改革に反対し重喜の足を引っ張るために、密かに大坂の間屋筋と気脈を通じたものがいたと考えられる。それは「阿淡夢物語」のような怪文書に藩の内部情報が比較的正確に書かれていることから、想定される。

そして最終的に重喜の命脈を絶ったのは、新規を怖れる幕府中央の保守主義だった。つまり重喜は、三つの力を敵に回していたのである。

大局的にみて、重喜の改革は、政治改革も経済改革も、それなりに合理性があり、前向きなものだったと評価できる。しかも、始めのうちは独断専行を避け論議を尽くしていこうという姿勢もあった。

しかし、既得権を失うまいとする家老層の根強い反対にあって、重喜は次第に専制的になっていったように見える。根底には、家老たちは「無能」で、ともに語るにたれない、という気持ちがあったように見える。……いや、実際に無能だったのかもしれない。重喜引退後、藩の負債は急増し、幼くして後を継いだ蜂須賀治昭も、成人した後「家老たちは藩を疲弊させてしまった」と述懐したという。

重喜は、守旧な藩内勢力にも、また海の向こうの大阪の商人にも、自己の権力で勝

てると思っていたのかもしれない。その読みに盲点があった。それは幕府中央が実は改革を嫌っているということ、守旧な藩内勢力が新規をきらうその幕府中央と結びついて自分に刃向かってくるかもしれない、ということを見落としていた。

幕府中央は、改革を焦って「専制化」した重喜の弱点を的確に突いた。

重喜はおそらく、即時にすべてを諦めたように見える。自分の口からは何の弁解もすることなく、三十一歳という働き盛りに卒然表舞台を去り、三十年以上の長い後半生を、非政治的人間として過ごしたのである。

最後に、重喜の朋友で有能な部下でもある怪人物斉藤十郎兵衛（写楽）について一言触れておこう。写楽は、現在でも、実在さえ定かでない謎の浮世絵師として広く知られている。しかしもちろん、この小説に出てくる写楽は全くのフィクションである。現実の写楽の生没年は一七六一年～一八二〇年と推定されており、重喜が活躍した時代には、せいぜいまだ生まれたばかりの赤ん坊である。

よく知られているように、写楽の浮世絵は、一七九四年（寛政六年）五月突然現れ、十ヶ月後に突然消えてしまう。そして、一八四四年の「増補浮世絵類考」という文献に「写楽：俗称斉藤十郎兵衛：八丁堀に住す：阿州侯の能役者なり」と書かれているのが唯一で、その実像はまったく不明であった。最近まで、その素晴らしい出来ばえから、著名な浮世絵師の変名の作ではないかという説が有力で、歌川豊国、葛飾北斎、喜多川歌麿、谷文晁、円山応挙など、何でもありというくらい同時代のグレートネームが挙げられていた。

ところが一九五六年になって「蜂須賀家無足以下分限帳」に「江戸住斉藤十郎兵衛」と書かれているのが見つかったのを皮切りに、斉藤十郎兵衛という人物が阿波藩お抱え能役者で江戸八丁堀に住んでいたという資料がいろいろと発見され、ついに一九九七年「徳島・写楽の会」が埼玉県の法光寺で斉藤十郎兵衛の過去帳を発見し、生没年や住所が確認された。さらに、二〇〇八年にはギリシャ国立コルフ・アジア美術館で写楽の肉筆画と鑑定される扇面画がみつきり、その筆使いが同時代の著名画家、浮世絵師の誰にも似ていないことが確かめられ、写楽の有名画家変名説はほぼ否定された。

結局、阿波藩の能役者斉藤十郎兵衛の实在は確かめられ、他方で写楽という極めて

強い個性をもった浮世絵師が存在したこともほぼ確実になったのだが、この十郎兵衛がイコール「写楽」だと直接書いてあるのは、現在でも「増補浮世絵類考」以外ないのである。つまり、最後の最後が意地悪くミッシングリンクになって謎が残る。

現在でも、例えば写楽の浮世絵に能楽師でなければ表現できないような要素がないか、とか、なぜ十か月という短い期間だけ現れてあとは全く消息がないのか、消えた後どこで何をしていたのか、とか、身許を示す資料がわざと隠したと思えるほど何も無いのは何故か、とか、考え始めるときりが無い。

それらの議論については、既に多くの本がでており、インターネットでもいろいろ見ることができるので、興味のある方は調べてみて頂きたい。

蜂須賀重喜も斉藤十郎兵衛写楽も、実証的研究が進みその実像が明らかになってきたが、明らかになればなるほど、また謎が深まるという「魅力」ある歴史的存在である。小説「写楽太平記」とこの解説が、その歴史と謎の世界への手引きとなれば幸いである。

(2012年／2015年8月小訂)